



江戸時代の利根川流域は、利根川の東遷などにより江戸～銚子間の船による水上交通が発達し、人や物資の往来で賑わっていました。そこは、豊かな自然に恵まれ、様々な文化が華開く土地でもありました。

『利根川図志』全6巻は、利根川にかかわる自然・地理・歴史・伝承などについて、いくつもの挿絵を交えてまとめられています。著者は、利根川流域の下総国布川村（現在の茨城県利根町）に住む赤松宗旦です。

今回の展覧会では、『利根川図志』の挿絵を中心とした内容を取り上げ紹介しております。川に関わる文化や歴史について興味・関心を深めていただければ幸いです。



このたびのパネル展開催に当たっては、下記の方々にご協力いただきました。厚くお礼申し上げます。

息栖神社 神崎神社 紅龍山布施弁天東海寺
光了寺 トモエ乳業株式会社

『利根川図志』について

『利根川図志』は、利根川中・下流域を紹介した地誌で、江戸時代末に刊行されました。現在の茨城県古河市から銚子市までの広い地域について、過去の文献と現地の見聞に基づき、挿絵を交えて紹介しています。その内容は、歴史・旧所名跡・名産品・風習・自然・地理など多岐にわたり、当時を知るうえでも大変貴重な資料となっています。書かれた時期については、はっきりしませんが、序文には安政2年(1855)とあります。

著者 赤松宗旦について

名前を赤松宗旦よしども義知といい、文化3年(1806)に下総国布川村に生まれました。8歳で父親を亡くし、母親の実家に身を寄せます。実家は、印旛沼近くの吉高村（現在の千葉県印西市吉高）にありました。11歳から医師の修行を始め、後に生まれ故郷の布川村で医者として開業します。宗旦は、書画・俳諧などに親しみ、文化人として利根川流域の医者や学者と交流があったようです。

『利根川図志』の後編も計画していたようですが、実現することなく文久2年(1862)に亡くなりました。茨城県利根町の来見寺に宗旦の墓があります。

【古河市】

静女舞衣

『静女舞衣縁起』を引用して紹介している。寿永（じゅえい）2年（1183）、静女(静御前)が京都で雨ごいの舞を披露した際、天皇から下された衣を身に着けて舞ったところ、みごと雨が降ったという。その衣は「蛙蟆龍（あまりょう）の舞衣」と言われている。

『図志』では、中田宿(古河市)の光了寺が保存しており、この寺が高柳村にあった頃に静女を埋葬したので、舞衣が残されているのだろうか、と記している。

出典：『利根川図志』巻2



思案橋

源義経の思い人である静御前が、奥州に向かった義経を慕ってここまで来たが、義経の訃報を聞き、奥州へ行こうか思いとどまろうかと考えあぐねた所と伝わる。

出典：『利根川図志』巻2

【野田市 関宿周辺】

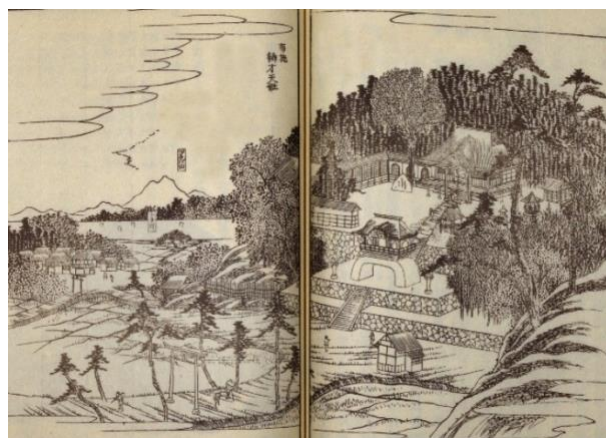


関宿城

古河公方に仕えた築田（やなだ）氏が築いた城である。天正18年（1590）に、松平康元が入城。その後、久世家の領地となり今に至る。『図志』には、久世氏は善政を敷き、万民は豊かである、江戸川の両岸に河岸があり、大変賑やかである、とある。

出典：『利根川図志』巻2

【柏市】

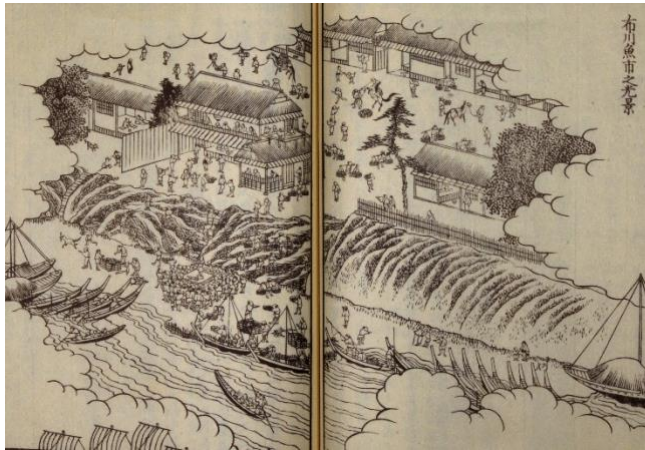


布施弁財天社（ふせべんざいてんしゃ）

『図志』には、紅龍山松光院東海寺（こうりゅうさんしょうこういんとうかいじ）といい、真言宗の寺院で、関東三弁天の一つに数えられ、参詣人も大勢集まると書かれている。本尊は3寸（約10cm）ほどの大きさの木造の弁財天像で、伝来については、紅い龍の伝説や弘法大師伝説が記されており、興味深い。また、対岸の戸頭（茨城県取手市）の渡し舟や寺院（社）のある曙山（あけぼのやま）の桜や楓などと共にとっても景色の素晴らしいところであると賞賛している。

出典：『利根川図志』巻2

【利根町布川】



布川魚市光景（ふかわうおいちのこうけい）

絵は布川の魚市の賑わいの様子を描いたものであるが、『図志』の記事では、利根川で使われている船の種類や、船の運航にかかせない天候の予測方法、利根川の物産である鮭等を紹介している。また、布川については『図志』巻3で、豊かな「魚米（ぎょべい）の地」で、魚や物が船で楽々と運ばれてくると述べている。

出典：『利根川図志』巻1

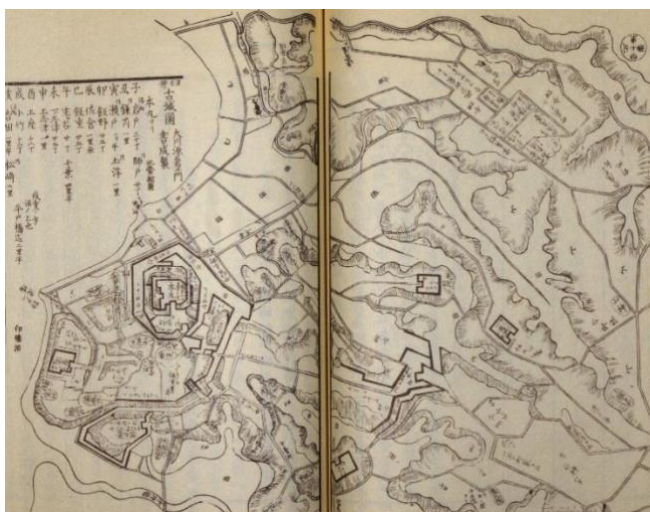


ツクマイ図

8間（約15m）の柱の上で、雨蛙の面を被り、竹弓を持った舞い人が演技を行う。布川神社の祭礼で、神輿が本殿に戻ってくる際に披露されていた。

出典：『利根川図志』巻3

【佐倉市】

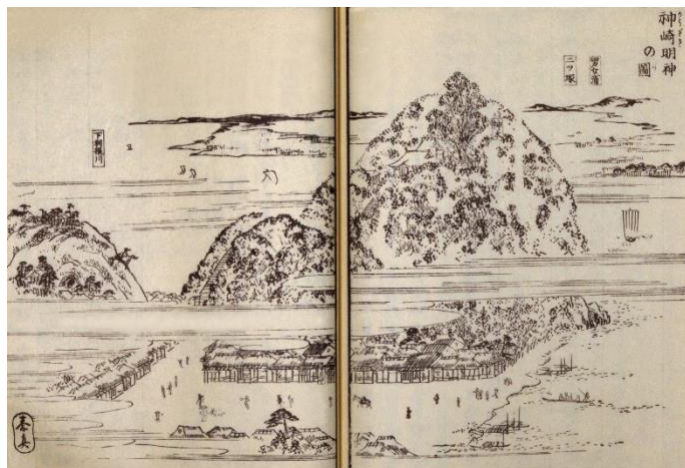


白井古城図

『図志』によれば、佐倉から北西へ4kmあまり行った白井宿（うすいじゅく）の台にある。白井城は、江戸時代初頭に廃城となっている。

出典：『利根川図志』巻4

【神崎町】

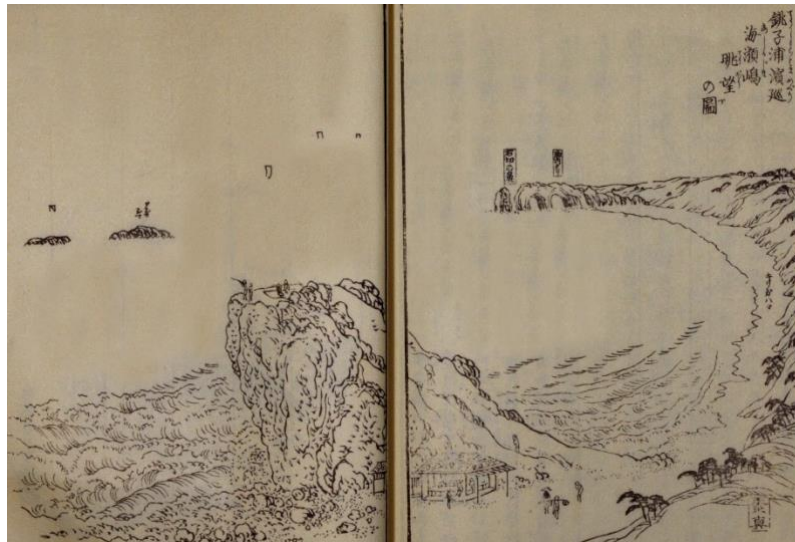


神崎明神（こうざきみょうじん）

『図志』では、神崎は利根川にさし出でてきた高い山の上であり、昔はこの山の麓（ふもと）の折れ曲がったところで川の水が逆巻き、「神崎の巻」といって難所として知られていたという。祭神は面足尊（おもだるのみこと）と惶根尊（かしこねのみこと）であるが、香取神宮の末社ではなく、独立した神事を行っていると書かれている。社殿のそばに「なんじゃもんじゃの木」と呼ばれる桂（実際は樟）の老木がある。

出典：『利根川図志』巻5

【銚子市】



あしかの図

あしか嶋眺望の図

銚子のあしかは、体長が2.5m程度で、頭が小さくて口が尖り、歯や牙は犬に似ているという。目は大きく、耳はとても小さい。また、口ひげが太くて長く、全身は短い毛で覆われており、普通は茶褐色（ちゃかっしょく）だが、白色、黒白雑色や蒼黒色（そうこくしょく）などもあると述べている。さらに、左右のヒレに爪があり、先が分かれている、というような記述もあり、あしかに対する興味や関心の高さが感じられる。

出典：『利根川図志』巻6